『人権を考える本②　子ども・障害者と人権』をよんで

六年　木村　佳純

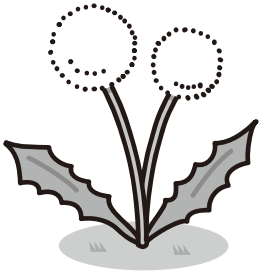
私は、人権についてよくわかりませんでした。それでこの本を読み、人権についてきちんと考えました。

その体験談は「死ぬのはこわくなかった」という話です。主人公の信彦君は中学三年生で、クラスの中ではいつもいじめがおきていたそうです。しかし、いじめる原因は何一つないそうです。私は、これを聞いてとてもおどろきました。なぜ、いやなことをされてもいないのにいじめるのだろうと思いました。私はこのような話をきくと毎回考えることがあります。それは、「言った側は大したことでなくても言われた側はそのことについて深く考える」です。これは、いやなことには限りません。いいこともです。相手が言ったことに対していわれた側はいいことだったらうれしいし、反対にいやなことだったらおちこみます。しかし、言った側はそのことをすぐに忘れてしまいます。おかしいと思いませんか。とても無責任です。しかし、人間はこれがふつうになってしまっているのです。今回の体験談の主人公、信彦君は、このような現象のせいで死のうとまで思ってしまったのです。幸い、家族が気付いて助かりましたが、いつこのようなことがどこでおこりうるのかわかりません。

私も一度、とてもなやむ問題をかかえることがありました。私は仲のよい友達がたくさんいました。その中に一人、個人的には好きでしたがクセがあってきらわれている子がいました。いじめほどではなかったけれど、みんなとあつかいがちがったり、ひどいことを言われたりしていました。本人の前では、

「大丈夫。そんなこと気にするな。」といっていました。でもいわれるところをみても「今自分がとめたら私も悪くいわれちゃうのかな。」と思い、いつもふみだせずにいました。しかし、その子の悪口をいっているところを見ると、とても悲しい気持ちになりました。だから、毎回どうするべきか考えていました。ある時、その友達が、かげでとても悲しんでいる姿を見つけました。そこで、はじめて大切なことに気がつきました。「一番悲しんでいるのは友達。他のだれでもないんだ。」と。そこから私は堂々と、その友

達と仲良くしました。でも注意まではすることができませんでした。しかし、今回の体験談の信彦君は、身内の信用していた人にまでがまんしろ。といわれてしまい死のうとしてしまいました。だからどんな形であろうとその人なりに、いじめられてる友達を守ってあげたらいいと思います。なにより、一つ一つの言葉に責任をもって、このようなことにならないように一人一人が努力していけばいいと思いました。

私は、この作文を書いて少し人権についてわかりました。少しずつでもいいから、このようなことを理解していっていじめや自殺がなくなればいいな。と思いました。

「人権を考える本②
子ども　障害者と人権」
著　坪井　節子
児玉　勇二
岩崎書店